

平成二十五年 第二十四回法華経・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナー

パネルディスカッション

高佐 三先生に、大変興味深いご講演を賜りました。今回は、「教団と原発——教団の意思表示を考える」というテーマで、この「教団論セミナー」を開催をさせていただきました。「法華経・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナー」は今回で二十四回めになるわけですが、日蓮宗は、教義・教学については大いに議論するけれども、教団論についての議論が足りないのではないかという問題意識から始まったというようなことを、先輩主任から伺っております。そこで、毎年、テーマを選びます際には、その時々で問題になっていることの中でも、なるべく教団論につながっているテーマを、と思っております。今年も、中央教研での経験を踏まえて、原発そのものをどうということではなく、原発に対して、教団、あるいは全日仏という組織が取った態度というものを通じて、教団や組織のあり方を考えていただきました。もちろん先生方のお話の中にも、自ずから、原発に対する姿勢、考え方は出てこざるをえませんが、その考え方についての議論というのを今ここでするのではなくて、そこへ全く触れないで済むかということ、それはいいかなんかとは思いますが、あくまで教団論としての観点からお話を進めさせていただければと存じておりますので、ご理解をいただければと思います。

先生方、それぞれ、先ほどの講演の中で、もし不足していた、言い落したというようなことがおありになりましたら、一言ずつ、まず、おっしゃっていただければと思います。あるいは、他の先生のご講演を伺った感想というようなことでも結構でございますが。順番に、武田先生からでよろしいでしょうか。

武田 はい。竹内先生から、曹洞宗の方と大谷派とは全然違うではないかと。特に、曹洞宗は社会に対して発言をしないという、同朋会運動を推進して積極的に関わってきた真宗大谷派との違いというものが言われていたかと思いますが、ちょっと、曹洞宗さんの、もう少し突っ込んで、その辺のところをまた聞いていきたいなと思うんですけども。ただ、大谷派の場合は、やっぱり既に社会に存在しているという前提がありまして、何も言わないということも、実は、社会に対して言ってるというか。例えば、原子力に対して反対しないということは、実は原子力を推進していることにもなるという。今まで、スリーマイルの事故があり、チェルノブイリの事故があり、また、日本においても数々の事故があった。そういった経験をしているのにもかかわらず、それに対して、われわれは何も顧みずにやってきた。そのこと全体が、実は、原子力を推進してきたと。そういう事実立って、社会に対して発言していくと。だから、何もやらなかったら、社会に対して何も言っていないことじゃなくなって、もう既に社会の中に存在するということが自分で、もう何も言わなかったら、じゃあ、何も言っていないことにはならないんじゃないかということですね。そういう課題も実はあるのではないかなというふうに、少し、聞きながら思いました。

高佐 はい、ありがとうございます。竹内先生、いかがですか。

竹内 ええ。そういうことじゃないんですね。この声明を作るときに、私たち、私の部屋に集まって、専任の연구원、共通に、思ったこと、口に出して、こういう形は、出すのはやめようって言ったのは、世の中の動きが全部、そのとき、もう原発反対になっていたわけですから、じゃあ、原発反対というふうにならざるを得ないことは、これは、発想としては、戦争賛成と言ったその裏返しにすぎないんじゃないか。そんな声明を出すのはやめよう。世間の流れとは別の視点から、宗教者として独自の視点とは、じゃあ、何なのか。この大きな流れの中で、見落とされている

ものがあるんじゃないか、見落とされている苦しみがあるんじゃないか。その視点から発言しようという、そういうことでございますので、社会に対して何も発言しないっていうこともなければ、行動もしないことではなくて、大変行動したということは、皆さんご存じだと思いますんで、それはちょっと誤解のないように。それだけです。今も、全体の流れと一緒になって発言し、発想するのはやめようという、そのところがみそなでございませうけど。

戸松 今、なかなか興味深いですね、お話が。

高佐 はい。早くもやり取りが始まってしまいました。

戸松 私は、今日は浄土宗ということではなく、全日仏として、今のお話を伺うと、それぞれごもつともで、日和見かもしれません。全仏としては、それぞれの教団の方の自己決定権を尊重するだけで、基本方針として、あの全日本仏教会の、代表の理事の方が賛同して理事会決議をしたということは、重いと思います。全日本仏教会の出した宣言文の趣旨に沿って、それぞれ実際の、個別の教義による解釈、あるいは、活動のしかた、意見表明のしかた、それは、私はあつてしかるべきで、それが、全日仏が出して、全く右へ倣えで、みんな同じにやるほど不健全なことはいし、社会からも、それは、本当に思つて、そうやってないと、私は解釈されると思います。

ですから、そういう意味では、いろんなこういう宣言文の出し方、解釈の相違、活動の相違。それが、私は、本当は、こういうことがちゃんといろんな公のところ議論がされて、そういうところを社会の人も見て、仏教界もちゃんと考えてると。要するに、建前じゃなくて、ちゃんと本音で、何をしようかということを実際に話してるといふ姿勢を伝えていくことが、すごく大事なな。ですから、これが公の何かものになるといえば、私は出てこなかったか

もしないんですが、そういう意味では、やはり、こういう機会を持っていた。今、なかなか、自民党政権になって、社会全体の経済が上向きになってきて、そういう中で、みんながまた少しずつ、良い経済的な感じを感じ出して、それが、例えば電気料金値上げだったり、それが、要するに、石油、化石燃料によるもので、原発にあればもっと安くなるのとか、そういう風潮になっていくと、こういうことも非常にやりにくくなっていくかと思えます。

それでも、やはり私は、全日本仏教会としては、出したあの宣言文に齟齬のあるような宣言も、もうこれからは出さない。それから、それに齟齬のあるような活動はしないということは、さっき言った、社会的責任ということで、聖なる部分と俗なる部分がある。そして、その宗教団体で、こういう教義的なお話を、聖なる部分で、どう解釈してどう表明するかということと、社会的な存在としての、例えば、包括宗教法人曹洞宗という、お寺が約一万四千方強あって、そしてこれだけの予算規模があつて、全国でこういう活動をしているという社会的存在としては、私は、私たちが言うことは全部、宗教的なことの発露であつて、それはもちろんそういう面も大事でしょうけど、それと同時に、社会から見れば、言ったことには、やっぱりそういう社会的責任というものが生じていくことかと思えます。

で、先ほど言われた、確かに曹洞宗の方はいろんな活動をしてる方がいて、私は、それが良いところでもあると思います。ですから、そういう意味では、全てに配慮をした言い方でちゃんと表明されるといふ勇氣は、非常に、評価できるといいますか、尊敬するところであります。以上です。

高佐 はい、ありがとうございます。三先生の講演に先立つ私の報告の部分を五分縮めたせいで、一点言い忘れたことがあります。そのお話を、まずさせていただければと思います。

私の資料のページめに二十四年の三月から四月にかけて、雑誌「SAPIO」の原発アンケートという記事が掲載されています。

この件につきましては、先月の宗報の「現宗研だより」に、「原発と中央教研」の三回めで、「雑誌「SAPIO」の原発アンケート」というようなことで書きましたので、詳しくは申し述べませんが、ともかく、全日仏が異例の見解表明をされ、あるいは、永平寺さんでシンポジウムが開催されたというようなことから、「宗教界、特に仏教会が原発問題について発言をしてるぞ、これは記事になるぞ、ニュースになるぞ」という観点で、「SAPIO」という雑誌が、各教団にこういうアンケートをしました。でも、「SAPIO」の記事を読んでみますと、編集部を確認したわけではありませんが、アンケートとして答えたのは、日蓮宗だけだったようなのでございます。他の既に見解を表明している教団は、「それを見よ」という形でお済ませになって、見解を出していない教団は、ちょうどお彼岸どきだったので、それどころではないということが出さなかった、というようなことがあったようでした。

日蓮宗としては、「現在ある原発のうち必要最低限のもののみを稼働させ、代替エネルギーの確保等の状況次第で、できる限り早く全廃に向かう」というのを選択して、回答した。宗会における宗務総長の答弁も、宗内のものと言えば宗内のものですし、宗会議員の声明も、決議というところまでは行っておりませんし、日蓮宗が原発についてなした対外的な見解表明と申しますと、公刊されている雑誌のアンケートに答えたということですから、もしかするとこれなのかもしれませんので、申し上げておきます。

あと、裏話を二つ申し上げて、これからのお話の材料にしていただけだと思います。この企画を立てましたのは、実は、昨年の教団付置研究所懇話会の大会がございまして、ちょうど武田先生や竹内先生もおいでになっておられましたですが、その時に、現宗研のと申しますか、中央教研の声明文が採択をされなかったという記事が出た直後の時期でございました。そこで、曹洞宗の方に「日蓮宗さん、どうもうまいかなかったようですけど、出そうとされた

声明文の内容が、うちで出した声明に似てらっしゃいますよね」っていうようなお声がけをいただいて、少し話をいたしました。

その時に、私、きちんと勉強しておりませんでしたので、先ず永平寺さんがシンポジウムを開いて、「これは、ちょっと宗門の見解とは違うぞ」というので、宗門として別の方向性の見解を出されたというように思い込んでおりましたんです。そうしましたら、竹内先生に、「いやいや、そうじゃないんだよ」と。「あれは、永平寺がシンポジウムをやるってことになったんで、実は、急遽、宗門としてのメッセージを研究所で支度して、出したんだ」というお話を聞いて、これはおもしろいと、このお話を是非していただけないかということで、今回の企画につながったというようなことが、一つございます。

フロアからも「当局と永平寺との関係というのは、その後、どんなふうになってるんですか」というようなご質問がありますので、後ほど、そのことも含めて、竹内先生にお答えいただけないかと存じます。

それから、昨日、お三人と打ち合わせをしていて、衝撃的でしたのは、全日仏は、当然と言えば当然なのですけれども、文案を作って、加盟団体に、これでいいかどうかということをお諮りになってたということを、戸松先生から伺いました。私はそのことを存じませんでした。つまり、日蓮宗に対して問い合わせがあったものについて、現宗研には下りてきていなかったということで、お恥ずかしい次第なのも分かります。あんまり公言していいことなのかどうか、みたいなどころもあるので、お叱りかしい次第なのでございますけれども、宗務総長を補佐する機関であって、そういうことを担っているはずの現宗研に、原発の声明文について、「全日仏からこういう声明文案が来てるが、何か意見はあるか」というような諮問はなかったでございます。これは、そのことも含めて、教団のあり方として考えるべき問題ではないかと、昨日、がっかりしながらも、思ったような次第でございました。もし、曹洞宗さんや、真宗大谷派さんや、浄土宗さんはもちろんなのですけども、「そんなことないよ。ちゃんと研究所に下りてきて、やってきたよ」という

ようなことがありましたならば、これは日蓮宗の大問題だということになるのではないかとも思いますので、その辺のご事情を伺えればと思います。

武田 大谷派の場合、教学研究所と宗門の関係上、そういう、内局にこういうことがあって、こういう件についてどう思うかっていう相談はほとんどなく、本当に教学的なことについてのみの問い合わせがあるので、多分、教研の方には下りてこなかったと思いますけどね。

高佐 これで安心しました。などと言ってはいけないのでございますが。

竹内 全日仏のことに關しては、こちらも知らなかったですね。それで、全日仏のあの宣言が出たとき、失礼ながら、戸松さんの采配だなんて思って、いや、さすが浄土宗、戸松さんが上にいると、こんなのが出るんだねって、そういうふうに勝手に思っていました、賛成してるとは思わなかったですね。

それから、あと、宗務庁と永平寺の関係、別にそれでもって悪化したとか、そういうことは全くないですね。私のところまでは下りてきてないですね。何やかんや言って、宗教的な権威は、やっぱり永平寺、總持寺、非常に高いものがございますので、お互いあんまりそこら辺は抵触しないように、やっぱり行政は配慮してます。

それから、先ほどの、社会全体の流れ。この場合は、非常に、国の政策それ自体に関わってくるような問題ですね。こういった問題に対して、社会全体がある一方の方向に動くこうとしていることに対して、非常に、われわれは、大きな流れの中に巻き込まれることに対して、かなり危険視する、距離を保とうとする、別の視点を確保しようとする。そういった意識が形成されていると思います。

じゃあ、社会的なその問題に対して、どういうふうに関わるとか個人がコミットしていくかということに関しては、例えば、原発を推進するか、やめるかっていうことに関しては、ひとつ、宗教を離れて、われわれ日本人それぞれが、投票行動でもって、行動できるわけですね。そういうものに関しては、その領域でもって、ちゃんと自分が持っている権利を行使すればいいというふうに考えております。その行使をするための情報を多角的に提供するのが、われわれの宗教者としての役割だというふうに、そういうふうに関わっております。

高佐 はい、ありがとうございます。

戸松 今、実は、これ、すごく大事なご質問だと思ひまして。例えば浄土宗の場合は公開シンポジウムとかやったりすると、例えば過疎寺院の問題だったり、ちゃんと事務方と打ち合わせしながらやっています、それが内局や宗務総長に上がってなかったり、そういうことはありまして、ちょっとあつれきが生じたり。それから、全仏で私が事務総長をやっている、事務総長が知らない間に事務方でいろいろなことが事後承諾で決まっています、でもそれは、私からすると、「責任取るのは誰？」って言ったなら、私だけじゃなくて、当時は、曹洞宗の元宗務総長の有田恵宗理事長が責任を取るわけで。これはやっぱり、知らなければ、責任の取りようがなくてですね。

全仏も含めて、各教団も、社会的な組織論がなくて、責任の所在の明確さ、意思決定、コミュニケーション、伝達の問題という組織論が、何十年も前の組織の形のままやっています、何となく大きな問題がなく過ぎてきてしまった。で、小さいところではあっても、あんまり言う、「お仲間だから、事を荒立てないで」ということで、今日まで来てしまったような気がします。

これはやはり非常に大きな問題で、これによって、私たちはかなり大きな、損失を出している。それはやはり、き

ちっとした意思表示だったり、私たちのちゃんと伝えたいことが、正確に伝わらない。それから、それを伝えるときに、その中で齟齬が起きてしまうと。それは一番信頼をなくすことで、意見統一をする必要は、無理にはないと思います。できないものは、する必要はない。ただし、一度出したものに関しては、きちっと組織として共有をして、誰が聞かれても同じ答えがちゃんとできるぐらいの、そういう意思伝達の組織的な構成が必要かなというふうに思います。これは、上から下も、下から上もあって、それによって随分無駄なエネルギーと時間が浪費されるような気がいたします。

高佐 はい、ありがとうございます。前内局の時の話でございますが、三原所長もそのように総長からお話があったとおっしゃっておられました。総長からじかに、「原発のこと、やっといてくれな」という指示を、ある時期に、いただきました。このことは、今、この場で、ご披露しておいてもいいのかなと思います。恐らく、「宗会でしたらべき答弁をするようになるだろうから、備えておけ」というような意味であろうというふうにしか受け取っております。そんなお話があったということは、申し上げておこうかと思えます。

それから、開催趣旨の文言の中で、戸松先生のお言葉を引きながら、「仏教者として原発問題をどのように考えるのかを、全日仏として表明する社会的責任があるだろう」と書きました。戸松先生、こういう発言をされましたのは確かでしょうか？

戸松 いたしました。

高佐 はい。宗教情報センターのサイトで、そういう報告を読んだように記憶しておりました。そこから啓発をされて、さて、では、日蓮宗にはその責任はないのかどうか、というような問題意識で書きましたならば、その責任という考え方が元々違うだろう、そういう発想は曹洞宗さんには全くないというお話を竹内先生から伺って、また別の刺激を受けたのでございます。その辺のことについて、大谷派さんはそれこそ全く違う立場、全く違う考え方でずっと活動をされていられているように思いますが、竹内先生のおっしゃったような、教団としての発言というものに対するスタンスと、大谷派でなされてきていることについて、武田先生、何かございますか。

武田 やはり、先ほども言いましたように、確かに、社会的責任とまで言われると、本当にその責任はあるのかっていうふうに問われれば、その辺はどうだろうかと思うんですけども。ただ、やはり、これからの教団、いろいろな税金の問題であるとか、存在意義ですね、社会に宗教教団が存在する意義というものが、むしろこちらの方は、いやあって当然というふうにも思っている、外から、様々なところから、先ほどのご発表の中にも、葬儀会社も遺族の相談をするんだというようなことも言われ始めていますし、だんだん教団っていうものの存在意義が薄くなってきたりするような印象もあります。そういう状況の中から、恐らく、戸松先生は、こういう社会的責任というふうな、そういう危機感というのを持たれて、そういう責任も果たしていかなくてはいけないような、そういう時代状況じゃないかっていうようなことを思われているのかな、とも思っております。

高佐 竹内先生は、「苦しむ人がいれば、それに寄り添う。それが宗教者だ。」と仰いました。それが宗教者だということは、それが、宗教者としての使命ということになるのかと思います。そうなりますと、「使命」という言葉を使うのか、「責任」という言葉を使うのか、というようなことなのか、とも思うのですけれども。

竹内 やっぱり発想が、どうしても責任ということになりますと、今回のその声明にしろ、そうなんですけども、大上段的に、賛成か、反対か、みたいな形になってしまおうと思うんですけども、やはり、宗教者としての活動といえますか、基本的なものっていうのは、やはり、人の個ですね、個々の人間の悲しみだとか、苦しみに寄り添っていくところから発していかなければならないんじゃないかっていうことでございます。往々にして、大上段に政策的なところでもって構えて行動すると、地道な具体的な目の前のことから、目がそれていってしまうという、そういうこともございます。

それから、これは、会場にいらっしゃる武田先生と、前に、浄土宗で、私が、生命倫理に関して、宗門の見解を発表して、相互にいろいろな意見交換したときに、私が武田道生先生から言われた、「ああやっぱり、禪宗は個なんだね」っていうことなんでしょうね。個を中心とした発想でもってものを見て、それに対して、やっぱり、浄土系教団っていうのは、やはり阿弥陀一仏信仰ということもございまして、上からの統一した宗門の見解というような、そういったニュアンスが、われわれにはない部分だなというふうに、どっちが良い悪いじゃなくて。そんなところを感じた次第でございます。

高佐 戸松先生、お二人のお話なども伺いながら、どのようにお考えですか？

戸松 そうですね、その「社会的責任」という言葉の問題なんですけど、なぜ私が全仏としてそう申し上げたかっていうと、常々、仏教界、それは、全日本仏教会、教団、お寺、僧侶、常に、命の尊厳、それから人権、そういうことを言い尽くして、ずっと来てます。それに対して、じゃあ、それを本当に具現化する、どれだけのことを、私たちはしてきたのか、日常、してるのかと。そういう意味で、それは、私は、宗教者として、法話で話して、耳触りが良い話

を聞いて、そして、気持ち良く帰ると。それもそれですごく大事だと思いますが、法話を受けた方は、それなりの期待なり、そういうものをお持ちになると。

それに対して、私たちが真逆のことをしたり、あるいは、そういう具現化に対して何もしないということに関しては、全日本仏教会は、公益財団法人としての社会的存在としてということを一歩強く考えます。

個の住職としても、住職という職責は、自分一人の問題だけでなく、檀信徒だとか、そういう方たちの関係性の中でしか存在しえない。だとすると、私たちの全仏のメッセージも……純粋な個々の問題に、原発を帰して、善悪論は一切言わない……。それを非常に気をつけましたけども、ただ、やはり、その個のところだけには帰しえないですね。それが、仏教で言う、ある意味で言ったら、縁起である。

私たちは、他の人たちの関係性の中で生きて、私たちが幸せを享受できれば、私たちには責任がある。もし、そういう私たちの幸せの関係性の中で起きてることが、他人の、苦であるならば、その苦に無関係ではいられないはずで、そういう意味で、責任があると、社会的責任があった点でございませう。

それからもう一つ、竹内先生が、「戸松さんがいたから出した」って言うのは違いました、私、いろいろ言うんですけど、いざっていうときは意外と慎重なんです。で、何といっても、やはり、河野太通会長の非常に強い思いがあった。それを受けて理事長は、「戸松さん、好きにやっていい。私が責任取る」って。本当に有田理事長だったからこそ、お布施の問題にしても何にしても、あそこまで踏み込んできた。あれが、理事長が、「戸松さん、こういうことやって、どうやって責任取るの？」って言われたら、私も責任取れないから、「じゃあ、止めます」と。有田理事長には、「私が責任取る」と、常々おっしゃっていただきました。そういうことで、私たちの期には、あそこまでのいろんなことができました。

で、その河野太通会長の一歩の思いは、やはり戦争のことでした。要するに、自分が軍国少年で、本当に国のため

に死ぬということを生きがい生きてきてたと。ところが、戦争が終わってみたら、今までの自分の生きかたが全部間違ってる。自分は何を基準に生きていったらいいんだというときに、仏教に救われたと。ところが、仏教を勉強してみれば、戦争を、間違っていたと教えられたものを、仏教も、要するに、正当化をしてやってきたと。で、それなぜ正当化したっていうのを考えてみれば、結局は、決して誰も、本当は、戦争はいいと思わなかった。ただ、そういう、戦争がいいと思わせられるような教育を受けてしまった。それともう一つは、それに対して声を上げることによって、必ず迷惑や悲しい思いをする人たちが出ると。そういうことを配慮すると、言えなくなってしまう。で、それが、今のこの原発の問題も、恐らく、原発の立地の地域の檀信徒の皆さんは、原発以外で生活を立てていくことは非常に難しいと。そういうことがあって、じゃあ、そういう方たちに配慮をして意見を出さないということは、また同じ過ちを繰り返してしまうと。仏教者として、あるいは自分たちの過ちを振り返ったときに、仏教者としてのアイデンティティーは何かとあったときに、やはり今回は、これに関しては意見表明をしなくてはならないという強い思いでした。草案出して、会長に送るたんびに、「戸松さん、手ぬるい」と言っただけで叱られ、それから、会長が出したって言ったのは、かなり強い、「脱原発」とか、「即時停止」「原発ゼロ」、具体的な文言が並んでました。それを、全日本仏教徒会議のときに、誰も怖いから行かないんで、私、行って、会長にお話しして、「それは、戸松さん、どういうことだ」と怒鳴られながら、なんとか削除をして。そうしないと、出せなかったんですね。だから、会長にも、「会長の思いは分かりますけど、出せなかったら何にも伝わりません」ということで、そういうふうな経緯があったんで、私だから出せたっていうことではなかったんですね。以上でございます。

高佐 いや、それでも、やっぱり戸松事務総長だから、お出しになれた。

竹内　ご苦勞のほど、お察しします。すいませんでした。

高佐　戸松事務総長のときほど、全日仏の言説が一般にも取り上げられた時期は、あまりなかったのではないでしょうか。特に、この原発の問題と、あのイオンの問題とですね。

先ほど、いろいろ、なぜ発言するのかということについて挙げられた項目の中で、特に、仏教者の言説と現状との齟齬、あるいは乖離というようなお話をされておられました。要するに、全日仏としてメッセージを出すことによって、言ってみれば、お坊さんに身を正させたいというご趣旨の発言があったかに伺ったのですけれども。全日仏として、対外的に世の中一般に出しますと、受け取るのは坊さんたちだけでありません。ご批判を申し上げるのではないので、誤解をしていただきたくないので、例えば、『産経新聞』で、デスクの赤堀正卓さんが、——敢えて固有名詞を出しますけれども、ドーンと記事を書いて、戸松先生と小谷みどりさんのコメントを付けて出したところ、読者からの反響の九割が小谷支持だったという話を、赤堀さんに聞いたことがあります。小谷さんは、お布施明示でいいじゃないかという発言をされたのですが。

そこで、仏教者の言説とわれわれ僧侶の現状との齟齬が、むしろ際立ってしまっていて、むしろ批判されてしまったという側面が、確かにあったろうとも思います。でも、そうではなくて、それに耐えながら発言することによって、われわれが身を正すべきだというお考えでされていたというのを昨日伺って、「なるほど、戸松先生はそういうお考えだったんだ」と勉強させていただいたのですけれども、このように、メッセージを表明した際に必然的に起こってくるマイナス面、それは、大谷派さんでも、原理主義的なメッセージを出されると、自ずからそういうものが出てくるのではないかと思えます。フロアからも、特に北陸などは真宗王国と呼ばれるような地域であると同時に、原発王国でもあるわけですから、「檀信徒から何かないのか」という質問もあつたりするのですが、その辺について、い

かがでしょうか。もちろんプラスの評価もあったろうと思いますが、マイナスの評価があったのか、あるいは、マイナス評価があった場合に、それに対してどんなふうに対応されたのかということについて、伺えればと思いますが。

武田 はい。もちろん議会では全会一致でこういう決議案が出たんですけれども、だからといって、大谷派の全僧侶、全門徒が反対というわけではないわけでありまして、やっぱり、福井のご住職の方から、「こういう決議案が出たけれども、原発なかったら、本当に寺もつぶれるし、門徒さんも困る」っていうような意見もございました。教研にそういう電話が一件かかってきたことがあるんですけども。ただ、そういう声明は出したけれども、その声明の出る教学的根拠を教えてほしいと。そういう現状はあるけれども、それが本当に、親鸞聖人、宗祖の教えに沿ったものなんだということを聞けば、なんとか自分も納得できるっていうところで、そういうことを言われてたかと思うんですけども、一件、そういう教学的根拠を示してくれという問いがありました。

高佐 竹内先生はいかがですか？ 声明に対する反応であるとか、先ほど申し上げた、永平寺問題に対してのことであるとか。宗内からでも、あるいは宗外からでも、何か、リアクションはございましたでしょうか。

竹内 あまり、リアクションっていうのはなかったんじゃないですかね。曹洞宗の声明自体が、そう反発を持って、生ぬるいという形で受け取られてはいないと、私は思いますけれども。

戸松 私としても、個人的には、本当は、あの声明文は、すごいフラストレーションで。やっぱり、私はずっと、アメリカから帰ってきて、エンゲージド・ブディズムということを標榜して、その実現に力をささげてきましたので。

だとすると、日本宗教団体の一つで、政治の集団を持って、実現しようとされてる方たちは違うかもしれませんが、私たちがやってきた、社会福祉活動だったり、社会活動、救援活動っていうものは、非常にずっと、いつも対外的ですね。何か起きて、苦悩があったら、それに対して対応すると。

だけでも、その仏教のやはり智慧と慈悲ということを深く考えていくと、智慧っていうのは一体何なんだろうという、苦悩との関係性ですね。それは、その個に介する、欲望との関係というものです。それと、社会システムによって生み出される苦もあると。で、もしその関係性の中で、個のことだけをやって、常に苦しみが出たら対処する。頭が痛ければ、バファリンを飲む様に。だけでも、なぜ頭が痛いのかと。そこまで深く見ていくのが、私は智慧かなというふうに感じておりました。

だとすると、今度の原発のメッセージも、なぜ原発なのか。なぜ、離れた地域にあって、使う私たちでなくて、遠い使わない方たちが、これだけつらい苦しい思いをするのか。そういうことを深く見ていくと、これは、原発そのもの、あるいは、原発を進めてる方たちが悪いとか政党が悪いとかの問題じゃなくて、やはり社会全体のシステムは誰が為政者になっても変わらないシステムとしたら、そういうシステムを、仏教者としてどう捉えて、私たちが何ができるのか。

ところが、それをやったのは、キリスト教では解放の神学で、それをやっていくと、社会運動化していくと。そうすると、思想的には共産主義の思想と近くなる。行われたのが、南アメリカ大陸ですね。当時は、チリにはピノッチェって独裁者がいたり、アメリカが支援してると。そこに、そういうグラス・ルーツで平等の思想が起きてくると、それが共産主義の活動ゲリラと一緒になくなってしまって、神父さんたちが弾圧をされる。それから、韓国では、民衆神学っていうところで、民主化でやる。それから、フィリピンも、そういう闘争の神学っていう、The Theology of Struggleっていうのがある。

私、そういうのを勉強してましたから、その非常に危うさと、で、そういうところで、にっちもさっちも行かない、自分の中の矛盾を感じながら、実際には。だから、今日も、ちょっとぜひ皆さんにもお伺いしたかったのは、やはり、そういう対処的な事を、私たち日本仏教ではそういうことをずっと中心にやってきたけども、その根源的なところの苦というものの、社会システムのところまで、私たちが立ち入れるのか。もし立ち入れるとすれば、どういう形でできるのか。あるいは、そこはやはりできなくて、これは仏教者として、あるいは、仏教の思想を持つ人間としての限界性があるって、その対処的なところ、あるいは、問題を個に介して、個のところから積み上げていくしかないのかってというのが、私が、本当に強く感じた課題でした。

高佐 時間が少なくなってきましたが、そろそろフロアの皆様から、ご質問を伺いたいと存じます。事前に出していたいただいたものから、私なりにピックアップをさせていただきながら、お話を伺ってきたつもりでもございますが、「俺の書いたことは聞いてくれてないぞ」とか、「書かなかったけど、これを聞きたいぞ」というようなことがございましたらば、ご発言をしていただければと存じます。ございませつか。どうぞご遠慮なく。せっかく書いてくださったのに、短時間でしたので、読み切れなかったものもあろうかと思えますが。いかがでしょう。はい、では浄土宗の武田道生先生。

武田 すいません、ゲストなのに。ちょっと、じゃあ、盛り上げるために。

高佐 はい、ありがとうございます。

武田 最初、ご案内いただいたときと、後半のフロアになったときと、だいぶ方向が変わってきて、二つ楽しんでおられますけども、ちょっとつなげてみようかなと思ってるのは、戸松先生がおっしゃった、組織っていうか、宗教団体の組織の問題の意味、研究機関の意味もありますけれども、それと原発をくっつけてみると、どうかなあと。戸松先生のおっしゃった、社会性ですね、教団の社会性とか、社会的な責任としての効果、それを実現する方法っていうのを、やっぱり考えるべきだと思うんですね。

それは、戸松先生がおっしゃったように、個なのか、それとも関わりの中とかと考えますと、今回の原発にそのことを当てはめてみると、やっぱり、教団として、全日仏として、いわゆる通仏教的な、伝統宗教としての発信、責任多くの、仏教に関心持つてる人たちとか、お寺の檀家であったりとか、新宗教も含めて、やっぱりそういう仏教系の人たちに、意味付けを与える、方向性を与える。「ああ、こういうことやってるな」という評価になる。

それと同時に、戸松先生のでちょっとあれだったのは、私、思ったのは、教団というところにも、やっぱり社会的な発信っていうのが必要だと思うんですね。教区とか、それとか、お寺に対してっていう内向きの発信ばかりじゃなくて、やっぱり教団というものの、何々宗ということの、一歩、一つ下がったところでの意味ですね。例えば、曹洞宗一万四千、浄土宗七千ヶ寺であったりとか、みんなそれぞれ、「あつ、うちの宗教がこういうことやってるんだ。こういうことをやらせようと、われわれに訴えかけてくれるんだ」というようなメッセージというのは、とても重要だというふうに思うんですね。それがさらに、お寺に行けば、住職が、それぞれのお檀家の方に、ことあるごとに、お施餓鬼とか、施食会とか、様々なときに、そうした命の問題とか、例えば、慈悲の心での布施。苦しむ人たちへの布施行として、ボランティア。お金を集めるとか、物品集めて送るとか、様々な活動につながって。

こういうことを考えると、原発ばかりじゃなくてもそうですけども、やっぱり、教団の発信するものっていうのは、外部と内部に両方に、縦糸と横糸のようなのがつながってあって、そしてそこで初めて有効になってくると思うんで

すね。ですから、竹内先生のおっしゃった、個人に意味付けを与える、曹洞宗としてのあり方、それはもちろん、すぐくとても重要だと思っんですね。ただ、それを受け止める、つまり、お檀家レベルから言ってしまうと、お檀家の一人ひとりが、住職選べるわけじゃないわけですよ。うちの住職は、例えば、「あつ、こつちに賛成派のような意見を言ってる」とか、「えっ、私のときは、違うこと言っていましたよ」みたいに、「私はそつちですからね」みたいなことになってくると、やっぱり何か、寄り添うっていうのはとても難しい、言葉は優しく、いいんですけど。

それから言うと、われわれは、大きく言えば、日本の未来にも寄り添ってかなくちゃいけないと思うんですね、未
来の日本人に対しても。言われてる方っていうのは、目の前にいる人ばかりじゃなくて、やっぱり、大きく、強く、
持続性のある発言。戸松先生のおっしゃったような、「やっぱり変わっちゃうんじゃないの?」っていうようなこと
を言う人がいたって言うけれども、私は、やっぱり変わらないのは、このときあった被害の問題とか、そのことから
こういうようなメッセージを発したっていう姿勢は変わらないと思うんですね。だから、その姿勢の方が大事なの、
やっぱり、社会的な存在であるかどうかってことは。

例えば、残念ながら、今、私のいる研究所は、発信していません。これはもう本当に、私としては、慙愧に堪えな
いっていか、未来に対して責任を負えない教団なんだなというふうに思ってます、本當言うと。自分の力が足りな
いってこともありますが、ということを考えると、やっぱり、現在の人ばかりじゃなくて、未来にも、大きくは、
われわれは寄り添って生きる、浄土宗だと共生とか言ってしまうかもしれませんが、必要があるし、この組織そのものを
有効に活用する必要があると思う。例えば、お寺が、檀信徒に対して、「スイッチを切ってね。省エネしましょう」
とか、LEDに替える。替えるにあたっては、お金もかかりますから、そのためのいろんな方策を考えると、でき
ることは、たくさんあります。教団レベルで発信したことを実現に移すのは、お寺の住職と檀家なんですね。そこで
の行動力をつけさせないと、発してるだけでは。意味がない、社会には、発してるだけでいい。

でも、その後、実際には、ネットなどを通じて、「浄土宗は、太陽光発電による発電力、これだけになりました」というような発信を常にしていくことによって、教団が持続的に社会と関わって、積極的な活動をしてるっていうことを印象づけること、できます。一般の人たちも、「それだったら、やってみよう」になる。

やっぱり宗教の一番大きな力っていうのは、持続力だと思っんですね。その宗教に関わってる限り、浄土宗で言えば、死ぬまで。戸松先生の熱が下がれば終わるって話で言えば、ずっと体質改善をしていく。その中で、少しずつ、少しずつつけて、その仲間を増やしていく。こういう、いわゆる縁起じゃないですけど、共同性っていうか、一体性がやっぱり宗教の持つてる力で、一人ひとりがやってることは小さいけども、一つのお寺がやって、それが地区のお寺になって、っていうことを広げてくことによって、大きな力になってくんじゃないかって思っんですね。ですから、私はやっぱり、組織の問題っていうのは、幾つかの分け方の中で、総合的に行くことで初めて力を発揮することになるんじゃないかっていうふうに思いました。失礼します。

高佐 ありがとうございます。今の武田道生先生のご発言のどの部分をどのように壇上の三先生に振ればいいのか、なかなか悩ましいところがございますが、フロアからの質問用紙の中にも、「このメッセージとして出したものを、今後のどういう行動につなげていきたいのか」という質問や、あるいは、「宣言文は、あくまで手段なんですよ。単なる決意表明じゃないんですよ。ワンステップなんですよ」という念押しがあったりするのですが、その辺のところを、今の武田道生先生の話に加味していただいて、お答えをいただけないでしょうか。では、はい、武田先生から。

武田 はい。武田ですけども、本当に、おっしゃること、その通りだなあと。未来にも寄り添うっていうことをおっ

しゃられましたが、強く持続していくことが大切だと思います。

また、曹洞宗さんの方は、電気をみんな、LEDに替えるとか、具体的な行動にも移られていますし、その点は、大谷派ではまだまだかなという点もありますが、環境問題から、資源に対する、啓発といえますか、そういった活動は、実は震災以前から宗務所の中でも始まっています、そういったことを継続していくということが、これからの持続活動の一環にもなりますし。

やはり、言われた通り、宗派が強く声明を出すということは、それは社会に対してであると同時に、その組織に所属しているご住職であるとか、門徒さんがそれに従って、一つの行動につながっていくというのが、組織であるし、やはり教団が存在する意味でもありますし、そこからまた社会へと、こういうふうに社会を変えていく、変革していく原動力にもなっていくということにもつながっていくと思うんですね。そういう大切な意味を、改めて学ばさしていただきました。

ただ声明を出すだけではなく、その宗門の一人ひとりが、門徒さんとの関係の中で、本当にそこが伝わるってところが大事なんで、そのところがまた一つの大きな課題でもあるんですけども、その宗門が出したことを、さらに教団の中でさらに徹底させていくっていいですか、教団から、やはり個々へっていうところへですね。

大谷派ではよく「自覚」という言葉を使うわけなんですけど、その個人個人、一人ひとりのそういう決議文をどう自覚させていくかというのが、一つの大きな課題ではないかなと思っております。

竹内 社会に対する発言といえますか、社会的な行動につながる発信という点では、曹洞宗は恐らく、今、思い返すに、人権に関して以外は、はるかに力は弱いと思いますね。そして、われわれの人権問題、同和問題に人権意識は発してあるわけですけども、今回、ビデオで皆さんに少しご紹介したように、これが人権が守られたかという視点でも

って作られてる。このことは、とても大きな意味があるんじゃないかと思えます。だから、この延長上に全て、結局、じゃあ、人権が損なわれている現状が、今回の原発事故で、あるわけですから。じゃあ、そういう状況を作る原発ってというのは何だったのかっていうことで、そこに自ずと、原発に対する姿勢というのは、もう出てきてると思うんですね。

私たち、何度も言いましたように、多角的な視点から、一方に流れようとするところからはみ出すところでもって、様々な苦悩があるんだよ、そちらの方にも配慮しなきゃいけないよって、そういうことを言っておられますけれども、それは、ある新宗教の教団の方から、「いや、曹洞宗はいつもどっつかずで、総当たりのだ」って、そういうことを言われたことがあります、つい最近もね。その時に答えましたけど、これはちょっと言い訳じみて聞こえるかもしれないけれども、禅宗では、「文書の道徳」って、質問したところに全て言い尽くされてるんだという。それは場当たりに指摘してるんじゃないじゃなくて、問題があるからそれを言及してるんであって、「だから、どうせい」っていうことは、そこにもう、自ずと答えが在る。それは、だから、「全部肯定して言ってるわけじゃないんですよ」っていう意味合いが、実は含まれてるんですね。それはちょっと言い訳じみてるかもしれないけれども。

ただ、さっき、社会的なシステムっていう話もありましたけれども、システムは結構、見えるんですね。構造という、見えない部分。見えない部分を見せていく。それは、やっぱり宗教の務めじゃないかと思えます。それは、だから、かなり科学的な、社会学的な見地からも見せていかなきゃならないし、本当に具体的な、個人の苦しみ、悲しみ、そこら辺のところも見せていかなきゃならない。いろんな、見せるという場、方法、発想というのはあるんじゃないかと思っております。

戸松 私、ここ来る前に、ある方から、「戸松さん、きつと、日蓮宗さんへ行くと、つるし上げられるよ」って言わ

れたんですね。なぜかいいいますと、全仏の出したメッセージで、新聞にちょうど出てきましたが、少欲知足だけでは解決しないって書いてあって、「なんだ、全仏のは結局、少欲知足でそういう生活をしましよって、それで、この問題、解決するのか、手ぬるいんじゃないか、ということ言われるよ。だから、考えといた方がいいよ」って言われて来たんですけども、言われなくてよかったなと思っておりましたが、恐らくそれは、世間はそう見えてるということですね。

で、私たちの言説、教義、仏教の立場からこう考えるということは、多分、それは、いくら言っても、行動が伴わなければ、言えは言うほど、むなし響きになって。そして、ここで大事なものは、正直に気持ちを披歴さしていただきますと、大谷派さんは、本当に、統一性が取れていて、もう本当に、すばらしいと思います。ただ一つ、読んで思うのは、強く原発のことを非難し、私たちのあり方を非難し、非難というか、振り返り、そして、み仏の本願にそうように、命を救う社会をつくっていかうと。じゃあ、具体的にどうやるんだ、っていうところが一つもなく、これを読むと、やっぱり、非常に法話としてはありがたいけども、じゃあ、具体的に教団として何をやるんだと。

例えば妙心寺派さんは、宗務庁にソーラーパネルを設置されました。それから今、宗教を超えて、宗教太陽光発電所というのが、毎日毎日、発電量を出してます。これは、海外でも有名になりました。やっぱりそういうところを、社会も、檀信徒の皆さんも、恐らく見てると思うんですね。そういう意味で、社会的責任っていうことは、出したら、それを具現化する、やっぱり具体的な手だてを出して初めて、それが社会にメッセージを出したということに、私は、なっていくのかなと。

そういう点では、全日仏のメッセージも、実は、全仏っていうと、お布施の問題も、いろんな苦情を受けても、何もできないです。介入権、全くないです。「こういうメッセージ出したけど、じゃあ、遵守してください。どうですか」っていうことすら、加盟団体にも言えない。だとすると、全仏は執行機関でないので、私たちができるのは、

あの十人の事務方の職員と、事務総長、理事長でできるのは、皆様からいただいたお金と、募金活動をして、具体的にしている方を支援することしかできない。そして、第七次支援で、今は、持続可能な太陽光発電だとか、そういうことをやっている活動を支援するということでは、私たちはお示しができない。ただ、本当に小さな対処療法であっても、それを積み重ねる以外に、あのメッセージを社会に伝えていくという方法はない。多分、出して終わりじゃなくて、プロセスがすごく大事だと思いますよ、今、武田さんが言われたような。

そういう点で、曹洞宗さんの節電の実施って。これ、じゃあ、どのぐらい節電されたのか。それから、冷暖房の設定温度は、今まで何度だったのを何度にされたのか。それから、ソーラーパネルは今、どのぐらい、宗の組織としてあるいはお寺全体でのぐらいい入れられたのか。ということ、私が記者だったら、多分、聞くと思うんですね。やっぱりそういうことを常に念頭に置いて、私たちはやっていけないと、社会的信頼は得られない。それが、さっきのところに戻っていく。やっぱりその社会的信頼がなければ、何を発信しても、何を言っても通じない。まして叩くことも、本来の意味も失うところ、私は一番大きいかなっていうことで、課題ではないかなと、自分のあり方も含めて、そういうふうを考えています。

高佐 はい、ありがとうございます。天候を心配して、せっかく繰り上げて始めたのですが、結局本来の終了予定時刻になってしまったようでございます。まだまだ、お話を、続けたいところなのですが。

要するに、われわれの姿勢と行動が問われているという、いつものあり勝ちな結論に落ち着いてしまうのかも分かりませんが、伝統仏教教団の別々の宗派の先生方において、それぞれの宗派の事情なども吐露していただきながら、というようなことで、大変学ばせていただくことの多いセミナーになったのではないかと考えているところでございます。皆様方、それぞれにお持ち帰りいただくもの、それは、お土産のみならず、たくさん宿題をお持ち

ち帰りいただくことになったのではないかと思いますので、ぜひ、ご参加していただいた方々とともに、宿題を、少しずつでも、一つずつでも解決をしていく、その一歩目に、このセミナーがなればと期待している次第でございます。

どうも、三先生、大変お疲れさまでございました。ありがとうございました。